



感情って何？

(日本心理学会主催 高校生向け講座から)

同志社大学心理学部 教授

鈴木直人 (すずき なおと)

中川いさみ氏が描いた4コマ漫画『クマのプー太郎』に「体験ヴァーチャル・リアリティ(仮想現実)」という話があります。クマのプー太郎という主人公がヴァーチャル・リアリティでヨーヨーを体験し、「本当にヨーヨーをやっているみたいだ！」と感動してヴァーチャル・リアリティの器具を買って帰り、家に帰ってから、「本物のヨーヨーを買えばよかった……」と後悔しているという話です。この他にも、「幸せなものは炊き立てのごはんそれと枕」という野ウサギが、あるとき閃いて、枕に炊き立てのご飯を詰め込み、その枕で寝たところ、“ねちゃー”として「あんまり幸せじゃない……」とつぶやく話もあります。この漫画を文系の学生に見せると多くの人が“にやっ”と笑うのに対し、理系の学生は何がおかしいのかといった顔をするのが印象的です。枕に炊き立てのご飯を詰めるというのはともかく、ヴァーチャル・リアリティの技術は最新の技術を応用する素晴らしいものです。しかしそうした技術の素晴らしさとは別に、この漫画のクマのプー太郎や野ウサギが感じた心の在り方、そして最後の一言こそ、まさに人間的な反応であり、感情の表出なのです。

最近、感情に関する関心が高まってきていると思います。感情は、心理学、社会学、神経科学などの諸領域で、近代科学にそぐわないものとして研究されずに残されてきた分野でしたが、コンピュータ機器の性能の向上、廉価化、技術革新などを背景に、ようやく俎上に上がってきました。たとえば、以前は感情と声の関係

を調べようとする、音響学的特徴を分析するための音声分析器が必要でしたが、高価で限られた研究室にしかありませんでした。それが今ではネットのフリーソフトに落ちており、誰でもがその気になれば感情を伴った音声の音響学的特徴を調べることが可能になりました。これに拍車をかけてきたのがロボット工学の発展だと思います。アイボに始まり、ネコロ、パロなどの動物型ロボット、アシモや最近のアンドロイドなどの人型ロボット、こうしたロボットに感情を組み込もうという流れはごく自然なものであったと思います。ところが、ここで大きな問題にぶつかってしまいました。「感情って何？」という問題です。つまり感情がどのような現象かよくわかっていないという問題にぶつかってしまったのです。

感情の経験というのは、おそらく、先ほどの漫画の話のように、最も人間的な部分ではないかと思われれます。しかしながら、図らずもブリテツイシュ・コロンビア大学のJ. A. ラッセル教授(現在ボストン大学)が1984年に“Everyone knows what emotion is, until asked to give an definition.”と述べたように、感情という現象は誰もが日常的に経験し、誰もが知っているものであるため、個々の感情を含め、感情が心理学的にうまく定義できないということを一般の人々になかなか理解してもらえません。

なぜ、感情を心理学的に定義することが難しいかというと、感情にはいろいろな側面があるからです。まず第一に、感情は主観的な現象であるということです。ある状況に置かれたとき、怒りを感じたとします。「普通はそんな場面では怒りを感じないはずだ」と言っても怒りを感じ



Profile — 鈴木直人

1971年、同志社大学文学部卒業。1974年、同志社大学大学院文学研究科博士課程中退。京都府立医科大学第二生理学教室助手、専任講師を経て、1984年より同志社大学文学部専任講師、1986年より助教授、1991年より教授。改組転換で2009年より現職。医学博士。専門は感情心理学、環境心理学、精神生理学。主な著書は『学ぶ、教える、かかわる』（共著、北大路書房）、『感情心理学への招待』（共著、サイエンス社）、『心理学概論』（共編著、ナカニシヤ出版）、『感情心理学』（編著、朝倉書店）など。

たのなら、それは怒りであり、それ以外の何物でもありません。このため、「ワン」とも「ニャン」とも答えてくれない動物実験はしにくくなります。ブログを見ていたら「笑うネコ」という写真がありました。ネコは本当に面白くて笑っているのでしょうか。ネコのある表情を撮影したら、そのネコが偶然笑ったように見えただけのように思います。しかし本当のところはネコにきいてみないとわかりません。



<http://kinyan.kakurenbo.com/Entry/43/> より

第二に、感情は進化の過程で獲得した適応行動をとるべく生態を準備させるための生物学的、生理学的反応であるという側面もあります。W. B. キヤノンの緊急反応などがそれにあたります。ここで問題なのは、感情反応は誰にでも同じように起こるわけではないという問題です。たとえば、恐怖に関する実験を行うとき、よくホラー映画やオカルト映画、あるいはIAPS (International Affective Picture System) の写真などが使われます。しかしながら、これらの刺激を見て恐怖を感じる人もいれば、不快感を覚える人、中には面白と思う人さえいます。つまり与えられた刺激に対し、同じ反応が生じないという公共性の問題です。またさらに厄介なことに、同じ実験参加者が同じ刺激を見たとき、同じ感情が生じるとは限らないという再現性の問題も重くのしかかってきます。つまり、公共性、再現性が弱く、自然科学の一分野を標榜する近代心理学の分野になじまないという問題があるのです。これが感情研究が等閑視されてきたいちばん大きな問題だろうと思います。

その他に感情には機能的な側面や社会的な側面があります。紙幅の都合で詳細を省きますが、このように感情はいくつかの側面を持っているため、どれか一つの側面を解明しても、感情全体の説明になりえないというのが心理学から感情を定義する際の難しさの原因です。

感情というのは以上のように非常にあいまいで研究しにくい存在です。行動主義全盛の時代では、非科学的な現象であり、対象とすべきものではなかったかもしれません。しかしながら、人間の最も人間らしい部分であることもまた事実です。この人間行動に大きな影響を与える感情を解明しなくては、人間の行動を分析すること、本当の意味で人間を理解することにはつながらないのではないのでしょうか。

現在、神経科学をはじめとする諸分野が、感情を研究テーマとして取り入れ始めました。感情に関する研究に長い歴史と蓄積を持つ心理学は、感情に関する研究、強いては人間理解の研究をリードしていく責務があります。感情という現象は、表情には表出されなくても内蔵活動には反応が出ている人、その逆の人。そして、主観的には感情をほとんど感じていなくても表情や自律反応、脳の反応では何らかの変化が生じているということがあり得ます。感情はきわめて多面的な側面を持っているため、昔、P. T. ヤングが主張したように、感情を真に理解するためには、主観的な側面からだけでは不十分です。生理学的側面、神経科学的側面からだけでも足りません。行動的な側面も含めた多角的な側面からの検討が必要です。こうした研究をできる限り同時進行で行わないと、ますます「感情って何？」という問いの答えを混沌とさせることにつながるのではないかと思います。